



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第26号

2006年3月12日

## 社叢インストラクター資格制度

### 創設にむけて検討委員会を設置

社叢学会では、昨年来、社叢インストラクター資格制度の創設にむけて、理事を中心に社叢インストラクター資格制度特別検討委員会を設置し、資格の内容や要件について検討を重ねている。この資格制度の創設は、2005年秋から下準備が始まり、2006年4月の理事会で審議され、同年11月に社叢インストラクター資格制度特別検討委員会を設置し、具体的な検討が始まっている。

まず、資格制度の目標であるが、全国的な社叢の荒廃化を防ぎ、良好な社叢を保全・育成・活用を目指して地域で指導的に活動する専門家を育成することを目的とする。社叢インストラクターには、①社叢の現況診断と課題対策ができる専門家、②社叢の保全・育成・自然観察等、市民活動の指導者としてのタイプが考えられる。

当面は、社叢インストラクター養成セミナー受講生を中心に資格認定試験を実施する。また、資格認定をする社叢インストラクター資格特別認定保持者については、一般公募によるものとし、業績・経験などを資格制度特別検討委員会が勘案し、認定する受験資格は社叢インストラクター養成セミナーを終了し、2年間の実務経験を持つ者、社叢学会に關係する活動の業績、社叢学会以外での社叢の保全・育成・活用についての一定の業績、樹木医・森林インストラクター等関連する資格を保持している等を評価し、資格認定委員会が定める基準を満たしたものに受験資格を与えるものとする。

資格認定試験は筆記試験および口頭試問とフィー

ルド（社叢等）においての口頭試問を行う。

必要な知識は、Ⅰ自然科学系（工学系を含む）では動物・植物・土壌・都市計画、Ⅱ社会科学系として歴史・宗教・民俗・文学・芸（美）術、さらにⅢ社会活動系の知識・経験が問われる。

合否は資格認定委員会が原案を作成し、理事会が決定する。合格者は資格登録後、「社叢インストラクター」を称することができ、5年毎に登録以後の実務活動報告を提出すれば、資格を更新できる。今後は、早期に社叢インストラクター資格特別認定保持者を選定し、今年度の年次総会で報告し、今年度（平成19年度）中の第1回認定試験実施を目指し、2007年中に試験実施要綱を決定する。

なお、社叢インストラクター資格認定委員会委員は以下の通り。菅沼孝之：委員長（社叢学会副理事長・元奈良女子大学教授）、新木直人（賀茂御祖神社宮司・社叢学会顧問）、糸谷正俊（社叢学会理事・株式会社総合計画機構代表取締役）、井上満郎（社叢学会理事・京都産業大学文化学部教授）、奥富清（社叢学会理事・（財）自然保護助成基金理事長・東京農工大学名誉教授）、上甫木昭春（社叢学会理事・大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授）、武田義明（社叢学会理事・神戸大学発達科学部発達科学部教授）、林進（社叢学会副理事長・岐阜大学名誉教授）、矢幡久（社叢学会理事・九州大学農学部教授 熱帯農学研究センター長）、渡辺弘之（社叢学会理事・京都大学名誉教授）順不同・敬称略。



## ダム湖に沈んだ鎮守の森 ～奈良県吉野郡川上村大滝に築かれた ダムによって迎えたタブノキ林の結末～

講師 菅沼 孝之 (社叢学会副理事長・元奈良女子大学教授)  
コメンター 武田 義明 (社叢学会理事・神戸大学教授)

はじめに 奈良県吉野郡川上村内に1959年の伊勢湾台風によって大きな被害を受けたことから、水防ダムの建設が、大滝に計画されたが、紆余曲折を経て、1996年によりやく着工、2002年には本体工事が完成し、試験湛水を行ったところ、同村白屋地区において斜面上に亀裂が発見され、試験湛水を中止した後も亀裂の拡大はとまらず、家屋にも被害が及ぶなど、深刻な事態に陥ったため、白屋地区全戸が移転することとなった。そこで白屋地区の民俗学的悉皆調査を行うこととなった。白屋地区内の標高440mに鎮座する八幡神社の社叢調査も行われ、今回この調査がほぼ終了したことから、その概要について報告することにした。

**歴史** 八幡神社の創建は『大和名勝誌』(1455)によると延喜元年(901)とされているが、拝殿の棟札には、再建寛政5年(1464)、再々建延宝3年(1675)、さらに修復したのが享保10年(1725)とある。ことがわかる。一方、東に隣接する玉龍寺が天和元年(1681)の大風雨による山崩れで壊滅したことが記された文書が残っており、この余波の災害が八幡神社にも及び、1725年の修復されたものかもしれない。

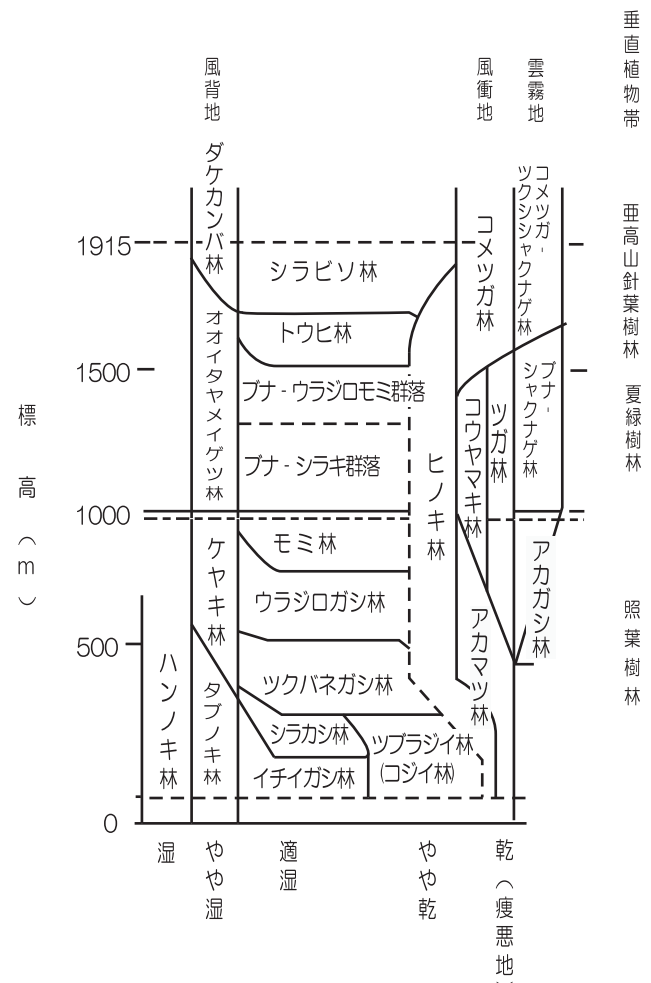
**八幡神社の社叢** 上記の歴史を考えると、八幡神社の社叢は1681年の災害を起点として考えると、300年余を経たものとなり、あまり人手が入っていない極相林であると推測されるが、これはタブノキの大きさからも妥当なものと思われる。この社叢の特徴はタブノキが優占すると照葉樹林といえる。周辺にはダム建設によって水没することになった県の天然記念物に指定された立派なタブ林を社叢にもつ丹生川上上社や、天武天皇神社があったが、残念なことにも伐採され、社叢は消失した。本来タブノキは海岸に多く生育し、このような山間地にまとまった林として見られるのは非常に珍しく、なぜここにあるのかは未だ解明されていない。タブノキ以外の樹木としては、カゴノキ、ヤブツバキ、サカキ、イヌマキ、ムクノキ、アオキ、ナンテンなどが確認された。

ここでもうひとつ特徴的なのは、内陸部の社叢には必ずといっていいほど確認されるカシ類がほとんど見当たらないことだ。ただ、この地で

もシカによる食害が発生しており、林床が貧弱になっていることが心配される。

**今後の見通し** 地滑りの発生によって集落がなくなるなど、より人手による管理がされにくい状況になり、今後、放棄された畑なども徐々に森に姿を変えていくことが予想される。どのような地滑りが発生するかは予想がつかないが、内陸部のタブ林という希少性を重視し、ぜひ、このまま残して欲しい。

**紀伊半島中央部の環境傾度に対応して成立する極盛相森林** 奈良県を中心とした地域の環境による森林の成立の様相は現時点で次図を考えているが、参考までに紹介する。





## 森林・自然環境・造園学

講師 熊谷 洋一 (東京農業大学教授・東京大学名誉教授)  
コメンテータ 藤田 直子 (東京大学森林風致計画学研究室・環境学博士)

砂漠化・温暖化・酸性雨といった地球全体での環境問題が深刻化する現代、自然環境を総合的に把握し、人間が自然景観に与える影響を予測評価する景観アセスメントは地球全体の保全と利用を促進し、自然と人間の共生を図ることを目指す実践的研究である。優れた景観と快適な環境を計画する方法論の探究は、東京大学農学部林学科時代に始まる。日比谷公園の「首かけイチョウ」で有名な本多静六先生(1866-1952)、本多先生と共に明治神宮の社叢を設計した上原敬二先生(1889-1981)、自然保護運動を通じ国立公園の父と称された田村剛先生(1890-1972)らの薫陶を受け林学・造園学に基づいた景観評価手法の研究を通じ、景観予測手法の研究を進めた。(初期森林風致計画学時代)

景観評価手法とは心理学が野外の自然環境へと持ち出された心理学的評価と、野外で実践的に培われてきた造園学が室内に持ち込まれた室内評価実験の融合による方法論によるものである。この景観評価手法を経て、人間の感覚を数量化し評価する景観予測手法の研究が進み、指標値による景観の客観的評価が可能となった(『景観アセスメントにおける予測評価手法に関する研究』1988)。東大農学部付属演習林がある秩父市を中心に森林風致計画学の実践的研究が100年に亘り続けられている。埼玉県で景観環境計画でもリゾートエリアと市街地の架け橋となる秩父公園橋(斜張橋)の景観設計や、群馬県と埼玉県を結ぶ昭和橋の架け替えにおける色彩計画などで地域景観との調和を図る事業にも携わった。また演習林の蓄積情報を基に、現実の森林をネットワーク上で3次元モデル化しようとする「サイバーフォレスト」を創作している。1991年よりシラド(仏)のアーマップ研究室との共同研究によりコンピューターグラフィクスを応用した植物成長モデルが開発され、地理情報システム上でより現実に近い森林景観シミュレーションが実現可能となりつつある。

1999年には東京大学大学院に学融合を基本理念とした新領域創成科学研究科が設立され、既成

の研究領域の枠を超越し様々な分野・バックグラウンドを持った研究者が議論を交わし共に現代社会の諸問題解決への方法論を見出してゆく次世代・先駆的学術の場が生まれ、より広範囲にわたる自然環境学・森林風致学の研究が行われるようになってきている。

同年に地域ごとの風土・文化の創造と自然環境保全を目指した「環境園芸」教育の場として兵庫県立淡路景観園芸学校(ALPHA)が開校された。淡路島の恵まれた自然環境の中で景観園芸・景観園芸療法・住民参加形態の花と緑のまちづくり講座が開設され、人材育成・生涯学習・研究調査・情報蓄積・産業振興が行われている。また敷地内の淡路夢舞台では国際ランドスケープ&ガーデニングコンペが開催された。これは意匠・施工・3年間の管理を経て審査が決定する景観デザインコンペで経年変化の評価が重視される新たな試みであった。

森づくりの実践の場として兵庫県尼崎21世紀の森構想にも参画している。かつて重化学工業地帯であった尼崎臨海地域では環境問題が深刻化し、加えて高度成長期の産業構造変化に伴う空洞化が進み地域の活力が低下していた。そこで約1000ヘクタールの森構想というまち再生事業が試みられつつある。これは行政・住民・企業・各種団体が協議会を設立し、「森が地域を作る」という理念の基に200年にわたる経年変化を伴う、世代を超えた森づくりといえる。この壮大な試みは生態学・工学・栽培学・デザイン学といった多角的視点が求められている。

このような景観研究を通じ「景観は結果であり、始まりであり、プロセスである」という思いに至る。本多先生の人生設計=教練期(6~20歳

三節: 節食, 節性, 節眠)・勤労期(21~65歳 三多: 多働, 多学, 多施)・奉仕期(66~85歳 四慎: 慢心, 贅沢, 怠惰, 名利)・楽老期(86~120歳 四快: 快働, 快食, 快眠, 快通)・永眠~121歳という長期の人生設計にあてはめてみると、これまでの研究とその成果を社会に還元・役立てるべき奉仕期にあるといえる。(文責=佐々木百合子)

### 次回予告【第25回関東定例研究会】

- ◆日 時: 2007年4月21日(土) 14:00~17:00
- ◆場 所: 國學院大学・渋谷キャンパス120周年記念1号館2階1205教室
- ◆テ - マ: 千葉県の鎮守の森の歴史民俗的考察
- ◆講 師: 猿田 正祝(猿田神社禰宜)
- ◆コメンテータ: 島田 潔(國學院大学日本文化研究所兼任講師)

\*次々回: 6月16日(土)~17日(日)日光東照宮にて見学学習会を開催



## 知立神社の社叢について

講師 神山 巖夫 (知立神社宮司)

コメンタリー 林 進 (岐阜大学名誉教授・社叢学会副理事長)

### 強者に翻弄された歴史

知立(ちりゅう)神社は、平安時代初期の伊勢物語の在原業平(825-880)の和歌で有名な「三河知立八橋かきつばた園」に近く、三河国を代表する旧東海道屈指の古社である。愛知万博に出展した「知立の山車」が境内の国重要文化財の多宝塔の前に集まり、国指定重要無形民俗文化財である山車文楽(3人遣いの人形浄瑠璃芝居)を奉納する。社地は、南東から北西の名古屋方面へ向かう国道1号線と南西から北東へ名古屋港から自動車工場が密集する豊田方面へ向う国道155号線の、二つの大動脈の交差点にある。

日本武尊が東征の帰途に吉備武彦と伊知里付命が高千穂の峯に坐す神々を迎えて創建したと伝えられているが、地理的に三河国と尾張国の境にあり、戦国時代には織田・今川両軍の戦場となった。天文16年(1547)に今川軍に焼かれて社地を移動し、さらに社殿の焼失により天正元年(1573)に現在地へ社殿を造営して今日に至っている。知立神社の神主永見氏の娘が徳川家康の正室築山殿の奥女中をしており、家康の最初の側室として恐妻築山殿から隠れるようにして双子を生んだ。双子の弟は神主家を継ぎ、兄は家康の次男結城秀康として関が原の戦の後に福井67万石の藩主となった。また、社殿配置は、東海道名所図会にあるように主要な建物が直線状にあって両側に翼殿がある尾張以外では唯一の「尾張造り」となっており、強者に翻弄された歴史が窺える。

### 社叢が天と地の水の循環を繋ぐ

社地は、逢妻男川と逢妻女川の合流地近くの遊水地にあり、周囲から一段と低くなった場所にある。別名「浮島の明神」と呼ばれ、本殿は石垣で1m位かさ上げされている。戦中戦後に、洋画家の和田英作氏(1874-1959)が当地に疎開されており、市資料館所蔵作品の「知立神社の森」には、田園の中の豊か

な鎮守の森が描かれている。劇作家の田中澄江氏(1908-2000)も、植物相が豊かであるとのことで岡崎光ヶ丘女学園の生徒を連れて植物調査に来られている。また、伊勢湾台風(1959)の折には大変な被害を受けて大量のクスノキが倒れた。その際、日展の彫刻作家の加藤潮光氏が倒木を利用した所縁の作品を数多く作って下さった。

しかし、社地が低地にあることから、水害には弱く、数多くの洪水の後には必ず樹が腐って、沢山の枯れ木が出た。大正12年(1923)の大洪水後の詳しい記録が残されている。伊勢湾台風前には大きな松や杉の木もあった。

現在の社叢はクスノキばかりの森になっているが、トネリコやイチイガシ(別名:甘樫)も残っている。昔の子供は、甘樫の実を拾って炒って食べた。風が吹くと競って拾いに来て、「ついでに杉の枝も拾っておいで」と母親に言われたものであるが、今の子供は誰も来ない。トネリコは珍木として保存されている。またクスノキの落葉は春秋に大変多く職員泣かせである。

境内の文化財に、多宝塔と養正館がある。多宝塔は室町時代の建立で、明治の廃仏毀釈を知立文庫として九輪を取り除き瓦葺に偽装して乗り切った。養正館は明治天皇の休憩所として保存された明治十年代の貴重な木造建築である。樹木や建築物の保存には、賛否の意見が交差する。

地下水の停滞もあり、植樹したスギ・ヒノキやサカキが早々に倒れたり枯れたりする。国道からの粉塵も最近では特にひどい。天と地の水の循環を繋ぐパイプとしての豊かな社叢を守り育てることによって、空気を清め、地に停滞した水を天空に還す活動を促す必要がある。(文責:岡村 穰)

## 次回・次々回予告【第12・13回中部定例研究会】

### \*第12回

- ◆日 時: 2007年3月24日(土) 13:30~16:00
- ◆場 所: 椿大社(鈴鹿市山本町1871 Tel059-371-1515)
- ◆講 師: 山本 行恭(椿大神社宮司)

### \*第13回

- ◆日 時: 2007年4月28日(土) 13:30~16:00
- ◆場 所: 太郎坊阿賀神社(東近江市小脇町2247 Tel0748-23-2247)
- ◆講 師: 中村 弘澄(太郎坊阿賀神社宮司)

福岡県支部設立記念市民講座 報告

2006年12月9日  
(於:太宰府天満宮・文華殿)

## 天神の杜（もり）の過去・現在・未来

講師 矢 幡 久(九州大学熱帯農学研究センター長・社叢学会理事)

## 応神天皇生誕の地 宇美八幡宮の社叢

講師 森 弘 子(九州大学大学院人間環境学博士課程修了)

### 天神の杜の過去・現在・未来

太宰府天満宮の県指定天然記念物のクスノキに衰退、枯死が認められ、平成6年から原因究明と養生工事のための調査が始まった。土壌調査の結果、ある深さのpHが異常に低い(=酸性度が強い)ことがわかった。なぜそのようなことになったのかという疑問を持ちながら土壌改良剤を入れたが、全く効果がなく、平成8年には心字池ほとりのクスノキが同様の衰弱兆候を示してきた。これを助けるために宮内に「樹木養生会議」が組織され、原因究明と再生のための調査研究が始まった。

pH以外にも土の硬度、樹木の硫黄含有量など衰弱の原因を調査した。まず根の発達状況を見るために、1mぐらい離れたところを掘ってみたが、腐った根しか確認できないというひどい状態だった。これは、心字池に沿って水道管を通した時に、機械で溝を掘ったことによって根を切ってしまったことが大きな原因ではないかと思われる。土木工事の際には付近の樹木のことを十分に配慮されることが必要だろう。

さらに様々な調査を行った結果、深さ90cmの土壌では、pHが低ければ低いほど樹木の健全度が落ちるという明確な相関関係がでてきた。土壌のpH低下については、鉄と硫酸が合わさったパイライトという化学物質の存在が考えられると思われた。これが堆積したところで耕作などをするとパイライトが酸化して硫酸に変わるために、強い酸性を示す。こうしたことがここでも起こっているのではないかと調べてみると、やはり酸化させるとpHが2.9になるような場所もでてきた。

パイライトがある所で通気性を良くするなど酸素を供給すると、より酸化して硫酸が出てくるといふ懸念から土壌を全て入れ替えることになった。経費はかかるが、平成14年の千百年大祭に向けてこのクスノキを甦らせたい、後世に残したいという宮司の心強い言葉に励まされて、必死になって対策を考えた。すべての問題が解決したわけではないが、目下、クスノキは順調な回復過程にある。

### 応神天皇生誕の地 宇美八幡宮の社叢

宇美八幡宮の社叢は安産信仰に関する伝説の地で、境内にある湯蓋の森・衣掛の森(いずれもクスノキの単木)・子安の石・産湯の水・蜷などが福岡県指定有形民俗文化財になっている。湯蓋の森は胸高周囲15.7mという巨木で、大正11年に国の天然記念物に指定された。幹に生えたコケの間に蜷という小さな巻貝が生息している。八幡信仰で蜷は大変重要視されており、甘木市の美奈宜神社には蜷で神功皇后が城を築いたという伝説がある。また宇佐では蜷を放生するが、これは隼人の乱で滅ぼされ蜷貝になった隼人の霊を供養するために始まったものといわれている。さらに、江戸時代まで、妊娠すれば湯蓋の森で捕ってきた蜷をコケをひいた桐箱に入れて神棚にそなえて飼ひ始め、お産が無事に済むと元のところに返すという風習があり、この蜷は木から離しても絶対に死なない「神蜷」といわれていた。

衣掛の森は、胸高周囲が18.2mでこれも大正11年に国の指定を受けており、こちらの方が湯蓋の森より大きいことを考えると、より古いのではないかと思われる。しかし元禄時代の絵図には衣掛の森については注記がなく、江戸時代の地誌類にも、衣掛の森については『八幡宮本紀』(元禄2(1689)年 貝原好古)に「神功皇后新羅より帰らせ給ひ、…後人これを湯蓋の森という。また産衣を掛けたるを衣掛の森と云う。太さ周囲四十数尺」という記述があるだけだ。

湯蓋の森については様々な記述があり、『宇美人幡宮縁起』(元禄6(1693)年 貝原好古)には「御産所に生茂る楠あり。其下に産湯をめさせ給う。其木大に繁茂し枝葉ことに美し。名付けて湯蓋の森と云う。此時産湯をまいらせし官女を湯方殿と号し当宮の末社に祝れ侍り」とある。さらにこの大楠とともに有名なのが子安の木といわれる槐の木で、『愚管抄』(鎌倉初期 慈円著)にも、「うみの宮の槐にとりすがりて、応神天皇をば生み奉り給ひける」という記述がある。

- 平成19年度の総会は5月26日(土)に京都の伏見稲荷大社で開催いたします。例年同様、研究発表やシンポジウムなど盛りだくさんです。詳しい日程は5月号に掲載いたします。
- 総会での研究発表者を下記の通り募集しております。日頃の研究成果や活動報告など、奮ってご応募下さい
- 総会での懇親会終了後、昨年9月号でご紹介いたしました向日神社の篝火狂言の見学を予定しております。また、翌27日(日)には、京都周辺の社叢見学会も計画中です。詳細が決まり次第、ホームページと5月号にてご案内を差し上げます。京都は緑濃い季節に入っております。ぜひ、ご参加下さい。
- 会誌「社叢学研究」第5号を同封いたしました。いずれも会員諸氏の力作ぞろいです。ご一読の上、ご感想などお聞かせいただければ幸いです。

春だから… でもないか。紙面がちょっと派手になったのにお気づきでしょうか？ 印刷屋さんと電子データの遣り取りができるように（今では出来上りを印刷して手渡ししてたのよ）新しいソフト（新発売のってんじゃなくて、私にとってってことです）の使い初め。紙で渡すんなら、図表は鋏で切り取って糊でちょいちょいと貼って、ってなもんでカンタン！だったのに、ぜ～んぶパソコンで作らなきゃ。で、いきなりですよ。菅沼先生の図！ 先生がパソコンで作った！というなら話は超カンタン！なんだけど、ど～みたって、手書き。手書きですよ、これは。かくしてマニュアルと首っ引きの日々が。。。お見苦しいところは初心者ってことでユルシテ。

「社叢学研究」の作成追い込みと重なって、えらい目にあわせていただきました。お蔭さまで帰りの電車は恥ずかしいほどの爆睡。益々ヨメにいけなくなる…。  
(藤岡 郁)

### 次回予告【第25回関西定例研究会】

- ◆日 時：2007年3月24日(土) 13:30～15:30
- ◆場 所：伏見稲荷大社儀式殿
- ◆テ – マ：地形の気色
- ◆講 師：樋口 忠彦（京都大学大学院都市環境工学専攻教授）
- ◆コソテータ：上田 篤（社叢学会副理事長・京都精華大学名誉教授）

### 研究発表者募集！

テ – マ：社叢に関する理論的研究  
社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究  
発表時間：20分（報告15分+討論5分）  
応募締切：2007年3月末日必着  
応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

- \* 応募者多数の場合は担当理事で協議し、4月中旬までに諾否をお知らせいたします。
- \* 発表者は、発表当日に配布する資料を4月末までに本部事務局にお送り下さい。

### 発行人

**社叢学会事務局** 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地 みよいビル303号  
TEL075-212-2973 FAX075-212-2916  
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

**社叢学会関東支部** 〒101-0031 東京都千代田区東神田 1-8-11 森波ビル2F  
TEL03-5875-8423 FAX03-5875-8321  
E-Mail shasou@macrovision.co.jp